

松江藩における「昌平校」モデルの移植

森 川 潤*

(受付 2022 年 10 月 4 日)

はじめに

老儒輩ハ皆徂徠學ヲ好ムノ風アリ¹⁾

松江藩は、寛延元（1748）年、6代藩主松平宗^{むねのぶ}の時代に荻生徂徠門下の宇佐美^{しんすい}澗水を江戸藩邸詰の儒者に登用する。江戸勤番や遊学から帰藩した藩士により「徂徠の経学」は国元にも根をおろす。10年後の宝暦7（1757）年、松江藩は林家塾から桃^{はくろく}白鹿をまねき、国元における藩士の教育をゆだねる。白鹿は、寛保3（1743）年に神田湯島の林家塾に入門し、数年後には林家の儒員として経書を講じたり、出講したりしていた。林家塾は、専門の学者の養成所として諸藩に儒者を供給していた。白鹿は、松江城下母衣町の役宅の敷地にもうけられた茅葺き一棟を教場とし、藩士子弟をうけいれる。教場は明教館と名付けられ、教授職は桃家が世襲する。3代黄園^{ゆうざん}の没後、30年あまり、園山西山、原田良助、原田新助という桃家以外の儒者が教授職につく。かれらは、桃家のように朱子学の学統をつぐ儒者ではない。

弘化（1844～1848）初年、9代藩主斉貴^{なりたけ}の時代に、藩学を朱子学だけに制限しようという触れが藩内にだされる。嘉永元（1848）年2月には桃家4代の翠庵が教授職をうけつぎ、嘉永6（1853）年9月には斉貴が隠居し、津山松平家から定安が10代藩主にむかえられていた。すでに幕藩体制の崩壊が兆していたが、定安は藩政改革の一環として藩校改革にとりくむ。

寛政2（1790）年の異学の禁ののち、多くの藩が朱子学をとりいれるが、親藩である松江藩では、藩学に「正学」と「異学」が併存する。本稿では、松江藩における儒学派の展開をあとづけることにより、松江藩が「昌平校」モデルを移植する経緯について検討する。

I. 諸学派の併存

松江藩の儒学教授桃白鹿の養嗣子である西河^{せいが}は、勤番でおもむいた江戸で異学の禁の現場に立ち会う。寛政2（1790）年6月に大学頭林錦峯と面談し、異学の禁について意見をもとめられる。西河は、「学流之義被仰渡委曲承知候私義何之異見無御座候」と返答する²⁾。京都、江戸への遊学により「諸儒学流」について見識をふかめた西河は、朱子学を「正学」とみなす立場を鮮明にする。西河は、文化4（1807）年に藩主侍講になり、享和元（1801）年、養父白鹿の死没後、儒学教授につく。西河は、儒者仲間だけでなく、藩士にも「徂徠は不徳な

* 広島修道大学 名誉教授

る人にて、程朱など、同日に論ずべからず」と述べ³⁾、反徂徠の立場を鮮明にしていた。「学問は徳を修むる為にする」ことであるという立場から松江藩に「正学」を根付かせようとする。

西河の没後、安永 8（1779）年に生まれた実子黄園が跡をつぐ⁴⁾。名は惟忠、通称は孝太郎、大蔵、号は黄園である。黄園は、享和 2（1802）年に「東遊」するが、林家塾に入門した形跡はない⁵⁾。黄園は一男一女をさずかるが、男児は「幼弱其上病身」であり、「御奉公相勤程無覚束」いために、坂根春沢の第 2 子、のちの翠庵が娘婿にむかえられる。黄園は、文化 14（1814）年 2 月に 39 歳で亡くなり、10 歳にもならない翠庵が家督を相続する。

桃家の敷地内にある明教館の教授職をついだのは、黄園より 15 歳ほど年長の園山西山である。幼少の桃翠庵が明教館を主宰することはできない。西山が藩校の教授に登用されたのは、西山のほかに明教館の教授職をつぐ適材がいなかったからである。教授職をつぐ儒者が朱子学派である必要はない。桃家の門下には教授職をになえるほどの朱子学派の儒者もそだっていなかった

園山西山は、宝暦 5（1755）年、松江藩士加藤理左衛門の第 3 子に生まれる⁶⁾。通称は勇三郎、名は雄、字は叔飛、号は西山である。16 歳のころ、藩儒者の原田新助に「句読」をさずけられ、安永元（1772）年には桃白鹿に入門する。西山は、西河より 4 歳年下であり、白鹿に入門したのも 4 年のちである。西山は、白鹿の推薦により園山善左衛門の養子にむかえられる。園山家は、西山をむかえたことにより「家業」を「儒学」にかえる。それは、儒学教授を補佐するスタッフの増員をめざす白鹿の要望である。西山は、儒学を修業し、園山家を「家業替」することになる。

西山は、徂徠派の儒者とみなされる⁷⁾。それは、第 1 に西山が「遊_二學于東都_一。師_二事瀟水宇佐美翁_一」したからである⁸⁾。西山は、江戸では藩邸詰の儒者宇佐美瀟水に師事するつもりであった。西山が江戸にたどりついた安永 5（1776）年 6 月、瀟水は「罹_レ疾」り⁹⁾、8 月に歿する。西山は、瀟水に師事することはなく、瀟水の門人であった豊島豊洲の家塾にうつる。豊洲は、「始メ徂來ノ學ヲ唱ヘ中年ヨリ後ニハ漢宋ヲ取捨シテ一家ノ言ヲナス」¹⁰⁾。元文 2（1737）年生まれの豊洲は、西山が入門したころには、折衷派に転じていた。折衷派は、一定の学説にもとづく学派ではないが、新奇な学説が競うなかで、漢唐の古注だけではなく、宋明の新注を参酌し、思想を相対化しようという流れのなかで生まれる。徂徠門下の瀟水に師事したとしても、豊洲のように徂徠学から離れるものも少なくない。

第 2 に、西山は荻生徂徠に私淑する松江藩士松原基から藩儒者としての将来を嘱望されていたことから、「徂徠派」とみなされる。松原基は、寛延元（1749）年に生まれ、15 歳のころ桃白鹿に入門する¹¹⁾。おなじころ桃西河、数年後には園山西山も入門する。松原基は、安永 2（1773）年に家督を継ぎ、寛政 2（1790）年には格式中老、仕置添役を歴任し、藩政にた

ずさわる。しばしば江戸におもむき、徂徠に教えを乞い、徂徠が儒学の教授・学習方法として著した『譯文筌蹄』の「題言十則」、『學則』の「二書」を「徂翁ノ人ヲ教ル作法明細ニ尽セル書」として尊重する。徂徠は、「講釈」には、才気あるものも、受動的に、無批判的に講釈を聴くために、型にはまり、天賦の才をのばすことができない、という「弊害」があると主張する。松原基は、会読を重視する徂徠学徒の立場から、「桃子ハ弟子ヲ講釈テ取立ルノ癖セアリ、故ニ門下ニ学ノ進ム人マレナリ」として桃白鹿に敵愾心をいだく¹²⁾。松原基は、「桃家ノ学弧行ノ後ニ伝ラス勢ヒアリ故ニ叔飛ト予ト相謀ツテ此書ヲ書リ」と述べる¹³⁾。西山が著した「此書」は『受業略説』である。松原基は、西河が講じる朱子学をまなぶものもなく、藩校の存続もおぼつかないと考え、西山を藩校教授に推そうと考えていたことが窺える。しかし、『受業略説』は、「多年物学ヲ信ジ固執ス」る松原基にとっては、「深ク信スル書ニアラズ」。松原基は、西山が護園派の朋党ではないことを認識する。

西山は、勤番のために江戸に滞在していた寛政4（1792）年4月から寛政7（1795）年5月までのあいだの「三月五日」、桃西河に荻生徂徠の言説についてたずねる¹⁴⁾。西山が、徂徠派の儒者であれば、徂徠の言説についてたずねる必要はない。

西山は、17歳年少の田村寧我とともに「馬鄭諸家之説」¹⁵⁾を考究する。寧我は、明和7（1770）年、水谷維明の第4子に生まれる¹⁶⁾。名は令終、字は子朗、通称は弥一兵衛である。松江藩士田村光武の養子にむかえられ、桃白鹿に師事する。「馬鄭」は、後漢の經学者の馬融と鄭玄である。馬融は、今文と古文の折衷と総合をめざす。鄭玄は、馬融に師事し、今文と古文を兼修し、多くの經書に注釈を付す。漢代には、今文で記されたテキストに依拠する今文学派と古文で書かれたテキストを典拠とする古文学派の論争があった。今文テキストは、漢代初期に焚書により失われた經書テキストが復元されるが、そのさい、学者が暗誦してきた文章を隷書で記したものである。古文テキストは、孔子の旧宅の壁中などから発見された經書のテキストで、秦代の篆書で書かれたものである。「馬鄭」は、今古文論争が盛んになるなかで經書テキストを折衷し、相対化しようという姿勢をつらぬく。日本でも古学がうまれると、經書解釈に、古注、新注のいずれにもかたよることなく、朱子学、古学、陽明学などの諸説を取捨しようという折衷学が台頭する。徂徠学を放棄し、「漢宋ヲ取捨シテ一家ノ言ヲナス」豊島豊洲に師事した西山がうけついだしたのは、折衷派の学統にはかならない。

西山は、安永5（1776）年6月、養家から江戸におくりだされる。天明3（1783）年にも「諸儒学流之異同見聞」のため私費で江戸におもむくが、江戸では「屋敷内素読等」を命じられ、さらに「立信院様御番方」、6代藩主宗衍の正室であり、世子治郷の嫡母である立信院の「御番方」を命じられる。西山は、藩内ではすでに儒者とみなされていた。西山は、9回、勤番のために江戸におもむく。文化3（1806）年7月には「殿様御学問御相手」、8歳で治郷から襲封したばかりの8代藩主斉恒の学問相手をつとめる。藩主からあつく信頼され、「家業令

出精」として、なんども褒賞される。すでに異学の禁が発令されていたが、西山がどのような学派を奉じているか問われることはない。安永 5（1776）年 8 月に瀧水が没したのち、その後任がおかれることなく、藩校の助教の 3 人、原田周助、桃西河、園山西山のうちひとりが交代で江戸藩邸で勤仕することになる。

西山は、文化12（1815）年 9 月、7 度目の江戸勤番から帰藩する。文化13（1816）年11月、嫡子団蔵が37歳で病死する。団蔵は、江戸にも遊学し、西山の後嗣として将来を嘱望されていた。後嗣を失った西山は、娘に「贅養子」をむかえ、「家業相続可仕」と考えるが、「年齢相應之者」もなく、平野鬼平の嫡子亀太郎、すなわち西山の外孫、齢を継嗣にむかえる。西山は、文政元（1818）年 4 月、教授職につき、のちに藩主侍講を兼務する。文政 4（1821）年 4 月に69歳で死去する。齢は、同年 7 月には家督を相続し、「百石」を給与され、「大御番組」に組み入れられる。

西山の後任には原田良助が任ぜられ、文政 4（1821）年 7 月、教授として「明教館並御文庫御書物」を管理することになる¹⁷⁾。良助は、通称、易定、のち小窓と号す。原田家は、もともと藩医の家柄であったが、良助の祖父新之丞が、延享 4（1747）年 7 月、「還俗」を願いで、「儒者」として「留守居番組」に組み入れられる。宝暦年間には、「居宅」が手狭になるほど弟子が増加する。「儒者」の「家業」は、新之丞の子文之進、その弟周助にうけつがれる。周助は、宝暦 8（1758）年 6 月に松江に着任した桃白鹿のもっとも古い門人のひとりである。周助は、明和 9（1772）年に江戸勤番を命じられ、「大御奥御廣間番」をつとめる。江戸では、宇佐美瀧水が松江藩上屋敷の長屋を「講釈場」として藩士に儒学を講じていた。周助は、職務のあいまに瀧水に教えを乞う機会があった。周助は、安永 4（1775）年 7 月に帰藩する。翌月、松江藩職制に「教授」と「助教」がくわわり、周助は白鹿の「弟子」を「助教」し、「訓導」するよう命じられる。周助は、享和 2（1802）年に隠居を許され、良助が家督を相続する。

良助は、寛政10（1798）年 6 月に私費で江戸に遊学し、「御屋敷内読書等可令世話」を命じられる。寛政12（1800）年春まで江戸にとどまり、「御前様御番方」、7 代藩主治郷の番士添え役、「若殿様御番方」世子斉恒の番士などもゆだねられる。「御用出精」として、2 度褒賞される。良助は、享和 2（1802）年に家督を相続し、文化10（1813）年には嗣子無_レのため弟幹七郎、のちの新助を継嗣にする。良助は、文政 4（1821）年 7 月、西山の後任につき、7 年後の文政11（1828）年 6 月に歿する。それは、8 代藩主斉恒がはじめた『延喜式』の校訂が、斉恒の没後、その事業をひきついだ 9 代藩主斉貴のもとで完了する時期にかさなる。

文政11（1828）年 6 月、良助が歿すると、良助の実弟の新助が、良助の養嗣子になり、後任を命じられる。新助は、文政 5（1821）年、「家業」を「修行」するために、江戸に遊学

し、1年ほど滞在する。新助は、「御学問相手」、9代藩主の斉貴の学問相手をつとめたり、「易経和解」にたずさわったりする。老中水野忠邦が10万石以上の大名に「諸家蔵板」の翻刻を命じたさい、松江藩は「南北史」を校訂・翻刻するが、天保14（1843）年7月、明教館に「南北史御蔵版仕立御用」がおかれ、新助が主宰する。新助は、「南北史」の校訂・翻刻がすすむ弘化4（1847）年12月に病没する。

その後任には桃翠庵が選任され、30年ほど他家にゆだねられていた教授職は、桃家にもどる。園山西山の修學歷をたどることはできるが、原田良助、原田新助の修學歷は管見にはいらない。3人ともに、朱子学を奉じる儒者ではない。「儒学」の「家業人」の子弟のなかには、藩校で四書五経の講釈をおえると、笈を負うものもいるが、修學歷が詳らかでないものが多い。翠庵はすでに40代に達していた。桃白鹿以来、桃家は朱子学を家学としてうけつぐが、翠庵が選任されたのは、世襲という観点からであろうか、朱子学を奉じていたからであろうか。

II. 林家との繋がり

1) 『延喜式』の校勘・開板

8代將軍吉宗は、「本邦の古書」、それも「詩賦文章の類」ではなく、「政道をたすけ。治具にも備ふべきの書」を収集する¹⁸⁾。「唐商等もたらし来る類」のものからも「有用の書」をえらび、みずから蒐集につとめる。吉宗は、享保7（1722）年1月、「目録ノ書籍共御用ニ候間所有候者可被_レ差上_レ候」という逸書探索令をだす¹⁹⁾。「自分所有無_レ之候者」は、「家来」、「領地之寺社」、「百姓町人」にも問い合わせなければならない。「目録」には、『新國史』、『本朝世紀』などの古代日本の歴史書、『律集解』、『貞觀式』などの古代日本の法制、『寛平御記』、『延喜御記』などの記録類、『風土記』が記載される。それらは、紅葉山文庫において「冊府に闕卷あるもの」や「全部いまだ所藏せざるもの」である²⁰⁾。「目録」の書籍については、「林大学守父子」、林家4代の榴岡榴岡^{りゅうこう}、5代の鳳谷に照会しなければならない。桃家初代の白鹿は、榴岡と鳳谷のもとで、2代の鶯峰が編成した経科、史科、詩科、文科、倭学科の「五科」²¹⁾をまなぶ。林家塾では、漢籍だけでなく、日本の古典籍をまなぶこともできた。

吉宗は、「法律の書」をこのみ、とくに『延喜式』を愛読し、奥儒者や寄合儒者の荻生北溪、成島信遍^{のぶゆき}、深見有隣^{ありちか}、大学頭の林榴岡に明律や清代の綜合法典である「大清会典^{ていけん}」を研究させる²²⁾。『延喜式』は、律令の施行細則を集大成した古代法典のひとつであるが、三代格式のなかで、ほとんど完全な姿で伝えられているのは『延喜式』だけである。たんなる古代についての法令史料ではなく、成立時期である10世紀までの日本の広範にわたる分野に関する百科全書的な役割をはたす。

松江藩8代藩主斉恒^{なりつね}は、日ごろ「本邦古書」をこのんでいたが、『延喜式』の、さまざまな

異本を収集し、それらを校勘し、校訂版を開版・板行しようと思いつく。近世に一般に流布していた『延喜式』版本には清原賢忠と林道春の跋と明暦3（1657）年の年紀をもつ明暦本、明暦本に若干の修正をほどこした享保本（享保8年刊）があった。齊恒は、領内の郷村にまで『延喜式』の版本や写本を捜し求める。『延喜式』は「文物制度」が燦然とそなわる「皇室之盛」の時代に撰定された法典であるが、一般に流布する『延喜式』諸版は「濫悪」で、「繆誤極多」い²³⁾。齊恒は、文政4（1821）年ころ『延喜式』の校訂を塙保己一に依頼する。保己一は、7代藩主治郷の時代から「和学」をこのむ正室方子のために松江藩邸にまねかれ、世子齊恒の質疑にも応じていた²⁴⁾。齊恒の小伝は、つぎのように記す²⁵⁾。「月潭」は齊恒の茶号である。

（文政）十一年七月五日。獻藏版延喜式一部於幕府。初。月潭公好讀本邦古書。時有總檢校^{ハナハホ キイチ}塙保己一者。盲而該通古書。因常延致而學之。嘗與保己一及藍川玄慎等相謀。校訂延喜式。未成而卒。今公續其功。至是刻成。獻之。

塙保己一は、延享3（1746）年に武蔵保木野村の百姓荻野宇兵衛の長男に生まれる。疳を患い、少年期に失明する。鍼医術をならうが、明晰な頭脳と博聞強記を認められ、国史や古典をまなぶことになる。明和6（1769）年には、最晩年の賀茂真淵に入門する。保己一は、「異朝には漢魏叢書などよりはじめて。さる叢書ども、聞えたり。わが國には其例なし。さらばこゝにも。かしこにならひて。かしこゝにちりほひある一卷二巻の書を取り集めて。かた木にえりおきなば。國の學する人のよきたすけなるべし」²⁶⁾と考え、安永3（1775）年ころ、国史、国文などの典籍を収集し、『群書類従』の編纂に着手する。このころから、保己一の古典籍に関する造詣の深さが知られるようになり、保己一は、天明5（1785）年には、水戸藩彰考館総裁立原翠軒の推挙により水戸にまねかれ、『大日本史』の校正にもたずさわる。総検校に任官した保己一は、寛政5（1793）年11月、江戸麹町に和学講談所を設立し、門生の屋代弘賢^{ひろかた}などが会頭になり、講談会をはじめめる。和学講談所は、ほどなく林大学頭の支配下にはいり、幕府直轄の機関として財政的援助をうける²⁷⁾。

『延喜式』の校訂がはじまると、まもなく保己一が亡くなり、齊恒^{なりつね}も33歳で急逝する。齊恒の長男齊貴が文政5（1822）年5月に8歳で襲封し、朝日丹波重邦がその後見になる。齊貴は、文化12（1815）年3月に生まれ、文政9（1826）年に12歳で元服し、將軍家齊^{かたな}の偏名を受け、齊貴と改める。齊貴は父の「遺意」をつぎ、藍川玄慎に『延喜式』の校訂をひきつがせる。玄慎は、松江藩医藍川通青の子として江戸に生まれる。伊沢蘭軒の師である目黒道琢に古医方をまなび、長崎に遊学したのち、文化2（1805）年に松江藩医に登用され、江戸藩邸詰で世子齊恒の側医を命じられる。目黒道琢は、明和2（1765）年に幕府医官多紀元孝が江戸神田佐久間町に創設した躰壽館の講師である。玄慎には、漢方医学に関する訳著もあるが、日本の古代史に関する撰著も少なくない。和学講談所の初代会頭である奈佐勝^{かつたか}が校訂

した『廣隆寺縁起』の写本の巻末に「題貞觀儀式尾」が附される²⁸⁾。「題貞觀儀式尾」は、玄愼が著したものである。玄愼が保己一やその周辺の人びとと学問的なかわりがあったことを窺わせる。玄愼は、松平齊恒に『新撰姓氏録』に記載される氏族を検索するための『姓氏一覽』の作成を命じられていたが、『延喜式』の校訂を優先する。

齊貴は、元服の前年、文政8（1825）年9月、八代洲河岸の林家塾に「入学」する。大学頭は林述斎である。書生として林家塾にかよったわけではない。文人大名として知られる肥前平戸藩主松浦静山は、寛政3（1791）年11月に皆川淇園に入門し、「生涯師礼をとり続けた」²⁹⁾。静山は、参勤の途次、京都にたちより、淇園に弟子の礼をとる。齊貴も、林家当主の大学頭林述斎に師礼をとり、教えを乞うこともあったであろう。齊貴は、蘭学にも造詣がふかく、西洋砲術家高島秋帆の門人下曾祢金三郎に入門したこともある。

藍川玄愼は、『延喜式』本文50巻の校訂をおえ、校訂の根拠を記した『延喜式考異』8巻、付録3巻の執筆も終盤をむかえる。事業をひきついだ藩主齊貴は、先代齊恒が事業に着手した経緯、事業の進捗状況などを記す序文を起草しなければならなかった。校訂版は、文政11（1828）年7月、「齊恒校訂」として松江藩によって印刻され、幕府に献納される。雲州本『延喜式』と呼ばれる版本である。

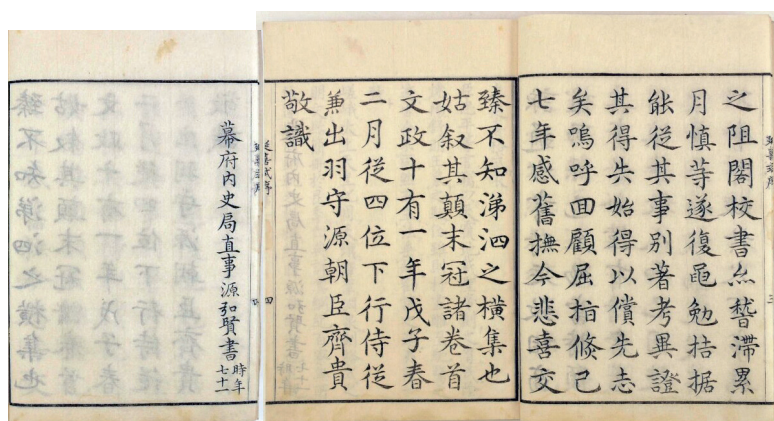


図1 校刻延喜式序³⁰⁾

雲州本『延喜式』の「校刻延喜式序」には、「文政十有一年戊子春二月從四位下行侍從兼出羽守源朝臣齊貴敬識」，「幕府内史局直事源弘賢書時年七十一」と記される。15歳にも満たない齊貴が「序」を起草し、当時、幕府右筆であった屋代弘賢が筆記した、という意味である。弘賢は、幕府の書役として出仕し、寛政2（1790）年には柴野栗山の「手附」として京畿の社寺調査にあたり、寛政5（1793）年には右筆所詰支配勘定格となる³¹⁾。幕命により『古今要覧稿』を著したり、『寛政重修諸家譜』などの編集にたずさわったりする。弘賢は、保己一

の門人として『群書類従』の編纂にもたずさわる。御家流の能書家でもある弘賢は、保己一とのかかわりにおいて、代筆を依頼されたのであろう。

「校刻延喜式序」は、林述斎の文集である『蕉窓文草』にもおさめられる。図2のとおり、「林衡徳詮著」と記され、表題は「校刻延喜式 序代松江侯」である。実際には、述斎が松江藩主斉貴の代わりに序を起草したことが窺われる。

斉貴が林家に入門し、述斎に師礼をとったのは、林家の支援をうけることを期待したからである。第1に、林家は幕府の文教機能の中枢をにない、紅葉山文庫の蔵書を充実させるために選書や蒐書をゆだねられていた。林家の後ろ盾があれば、雲州本『延喜式』は権威づけられる。第2に、塙保己一の没後、『延喜式』の校訂を継続するためには、林家が管轄する和学講談所に蓄積された専門的知識・技術の供与や史料の収集に便宜をはかってもらわなければならない。

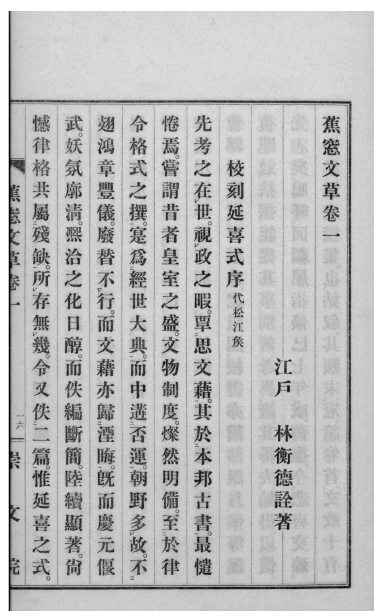


図2 校刻延喜式代松江侯³²⁾

2) 「南北史」の翻刻

天保13 (1842) 年6月、老中水野忠邦は、つぎのように布達する³³⁾。

文学之儀者、当時格別ニ御世話被為^マ在、追々官板モ被 仰付候処、諸家蔵板ニ至り候而者、僅ニ数十部ニ者不相過哉ニ候、一体大身之輩者、心掛次第大部之書一、二部ツ、モ蔵板ニ致し、普く後來江も相伝候様有之度事ニ候、此段十万石以上之面々へ、無急度可被相達置候事 六月

幕府は、「大身之輩」、10万石以上的大名に「諸家蔵板」を翻刻・上梓するよう命じる。松江藩でも、藩校に教授が収書・管理する「御文庫」が付設され、「御書物」が蓄積されていた。30歳になった斉貴は、この年、参勤のため参府していた。江戸在勤の家臣は、八代州河岸の林家塾に在籍する妹尾謙三郎に翻刻すべき家蔵版について林家の意見をもとめるよう命じる。

謙三郎は、文政5 (1822) 年、松江藩士妹尾清左衛門の3男に生まれる³⁴⁾。名は謙、字は君恭、通称は謙三郎、号は精斎、精翁、老雨である。天保2 (1831) 年、明教館の桃西河に入門するが、3年後には松江藩における「古文辞学の大家」と評される田村寧我³⁵⁾の学半舎にうつる。謙三郎は、天保9 (1838) 年11月、大坂への藩費遊学を命じられ、寛政正学派の学統をつぐ篠崎小竹に入門するが、ほどなく荻生徂徠に私淑する藤澤東咳の泊園書院にうつ

る。大坂滞在中、ほとんどのあいだ東咳塾にいたことになる。謙三郎は藩費遊学生であったが、天保10(1839)年ころには、儒流については遊学生の裁量にゆだねられていた。天保13(1842)年には、謙三郎は松江藩執政の神谷源五郎の上府に随行し、林家塾の塾長である河田迪斎の私塾に入門していた³⁶⁾。

謙三郎は、藩の内命により大学頭林檉宇と河田迪斎に意見をもとめる³⁷⁾。その結果、松江藩は唐の李延寿が撰述した『南史』と『北史』を校勘出版することに決定する。林述斎の門人であり、河田迪斎の師でもある佐藤一斎は、「史部」の書籍の冒頭に「南北史」をあげる³⁸⁾。「南北史」は、中国南朝の正史『南史』80巻、中国北朝の正史『北史』100巻からなる。唐の李延寿が、南朝と北朝の史書がそれぞれ自国中心の記述であることを是正し、公正な視点から撰述したものである。謙三郎は江戸遊学を1年ほどできりあげ、帰藩する。

藩校教授の原田新助が「南北史御藏板仕立」を主宰し、桃黄園の嫡子翠庵、園山西山の養嗣子齡、井上蟠、妹尾謙三郎が「御用手伝」を命じられる。天保14(1843)年7月、明教館において作業がはじまる。底本として、明の万暦19(1591)年に明の首都南京の国子監で板行された「南監本」、すなわち「万暦原本」が使用される。

原田新助が、作業の進行中、弘化4(1847)年12月に亡くなる。新助は、生前、後任の候補として、桃翠庵、園山齡、谷民五郎、井山団弥、志太謙次郎、原田新助の子治助の名をあげていた⁴⁰⁾。後任として5名の名があがるほど、藩校のスタッフは充実していた。翌弘化5(1848)年2月、桃翠庵が教授に任じられる⁴¹⁾。翠庵のもとで、『南史』と『北史』の校勘がつづけられ、上梓にたどりつく。「雲藩藏刻」の『南史』と『北史』は嘉永2(1849)年に幕府に献納される。同年1月、原田新助の子治助には「亡父新助」が「南北史校合」において「格別会心配」したとして「御褒美銀三枚」、桃翠庵、園山齡、妹尾謙三郎にはそれぞれ「御褒美銀二枚」が下賜される。褒賞は、選書や蒐書をふくめた幕府の印刷・出版機能をにう林家の支援をうけながら、「蔵板」の校訂・翻刻という困難な使命を完遂した藩儒者をたたえるものである。

Ⅲ. 「昌平校」モデルの移植

9代藩主^{なりたけ}斉貴の時代に、松江藩は林家とのつながりをつよめる。松江藩では、弘化(1844～

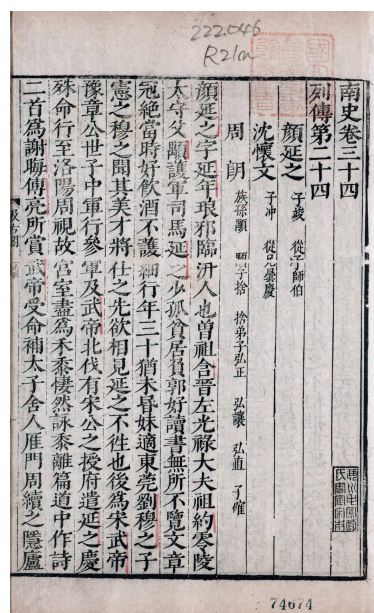


図3 『南史』³⁹⁾

1848) のはじめ、「藩學ハ昇平校ニ倣ヒ朱子學ヲ脩ヘシ」という触れがだされ、昌平坂学問所にならない、「藩學」を「朱子學」を修学する場に再編するという方針がしめされる⁴²⁾。弘化のころまでは、園山西山、原田良助、原田新助という桃家以外の儒者が教授職についていた。かれらは、桃家のような林家朱子学の学統をつぐ儒者ではない。原田良助と新助の兄弟については、徂徠派の儒者とみられる⁴³⁾。かれらは、江戸に遊学したり、勤番で滞在することはあったが、林家塾や昌平坂学問所に入門した形跡はみられない。弘化の触れに示された方針を遂行できるのは朱子学を奉じる儒者、桃家 4 代の翠庵のほかにはいない。

翠庵は、文化 3 (1806) 年 7 月に松江藩土坂根春沢の第 2 子に生まれる。名は世文および文之助、通称は題蔵、翠庵は号である。坂根家は、桃家初代の白鹿の実家にあたる⁴⁴⁾。桃家の養子にむかえられた翠庵は、11歳のころ敷地内の教場において本格的に修業しはじめる。翠庵は、天保 3 (1832) 年 4 月には「自力」で江戸に遊学し、八代洲河岸の林家塾に入門する⁴⁵⁾。大学頭は林述斎、塾長は佐藤一斎である。同年10月から「駒次郎様」、すなわち斉恒の次男の「御書物御相手」を命じられる。帰藩後も、斉恒の「御書物御相手」をつとめる。翠庵は、白鹿以来の朱子学を継承する桃家の儒者である。

嘉永 6 (1853) 年 9 月、斉貴が隠居し、津山藩主松平齐孝 4 男の済三郎が斉貴の後嗣にむかえられる。済三郎は、天保 6 (1835) 年 4 月、美作津山で生まれる。済三郎の義兄^{なりたみ}斉民は、11代將軍家斉の15男に生まれ、文化14 (1817) 年に津山藩主松平齐孝の養嗣子となる。斉民は、昌谷^{さかや}精溪を侍講として朱子学をまなぶ⁴⁷⁾。精溪は、寛政 4 (1792) 年、備中九名村で生まれる。名は碩、字は子儼、通称は五郎、号は精溪である。精溪は、筑前福岡の亀井南冥・昭陽、長門萩の明倫館にまなび、「江戸ニ到リ學ヲ佐藤一斎ニ受ケ又昌平黌ニ入り專ラ經義文章ヲ脩ム」⁴⁸⁾。江戸では、文化14 (1817) 年に八代洲河岸の林家塾の塾頭の佐藤一斎に入門し、文政元 (1818) 年には「昌平黌」にうつる。精溪は、文政 7 (1824) 年、津山藩儒者に登用され、斉民の侍講を命じられる。済三郎は、稲垣茂松いらい、朱子学が藩学問所に根付いた津山で生まれ育つ。稲垣茂松は、享和 3 (1803) 年に津山藩士の家に生まれ、江戸の古賀侗庵の家塾でまなび⁴⁹⁾、津山藩校で教鞭をとる。津山藩士の赤松寸雲、大村桐



図 4 佐藤一斎肖像⁴⁶⁾

陽も茂松のもとでまなび、侗庵門にすすみ、藩学問所の儒者になる⁵⁰⁾。済三郎は、少年期にまなんだのは朱子学である。

済三郎が定安として襲封した嘉永6（1853）年9月には、修好通商条約の締結をもとめるアメリカ東インド艦隊への回答に窮し、幕府は「亞墨利加より差出したる書翰和解寫二冊を宿老より下附し。國家の一大事たるを以て。群臣の意見を諮詢す」⁵¹⁾。絶対的存在として君臨していた幕府の権威は失墜し、すでに幕末の動乱が兆していた。

定安は、嘉永7（1854）2月、初入部し、「在國諸士」を引見する。「政務の餘暇」に「聖賢の學」にはげむことにし、翠庵などの「儒臣」にも接見し、桃節山を「學友」とする⁵³⁾。定安は20歳、節山は23歳である。節山は、天保3（1832）年、藩医杉貞庵の2子に生まれる⁵⁴⁾。名は好裕、通称文之助、号を節山という。嘉永2（1849）年に翠庵の養子になる。養父のもとで家学をまなび、田村寧我の家塾に入門するが、高齢の寧我的すすめにより、天保15（1844）年1月、妹尾謙三郎に入門する。嘉永7（1854）年5月、節山は「江戸勤番」を命じられ、江戸にたどりつくと、すでに江戸にもどっていた定安の「儒学御相手」を命じられる⁵⁵⁾。「儒学御相手」とは、藩主定安のことである。定安は、江戸でも節山を「學友」とし、しばしば長兄斉民の侍講である昌谷精溪をまねき、講席をもうける⁵⁶⁾。

節山は、江戸では、「昌平黌」で「佐藤一斎、安積艮齋等の碩儒に親炙せられた」⁵⁷⁾。勤番のかたわら、「昌平黌」に通ったということである。嘉永7（1854）年には、一斎は幕府儒者として昌平坂学問所敷地内役宅にいた。艮齋は、嘉永3（1850）年に昌平坂学問所儒者に登用され、神田鈴木町の自宅から通っていた。幕末の儒者の伝記類には、しばしば「林家へ入門スル」、「昌平黌ニ入ル」、「佐藤一斎・安積艮齋ニ師事スル」といった表現がみられる。幕末の思想界では、ふたりは碩学として知られていたが、かれらは、当時、八代洲河岸の林家の家塾ではなく、神田湯島の昌平坂学問所にいた。昌平坂学問所に入門しようとするれば、幕臣以外は書生寮にはいなければならない。節山は、職務のあいまに八代洲河岸の林家塾にかよう。

節山は、「儒学御相手」のために、再三、江戸に差し止められ、「来已春迄詰越被仰付」、すなわち安政4（1857）年春まで江戸にとどまるよう命じられる。節山が帰藩するさい、昌谷精溪、大沼枕山から「送__桃君__」という惜別の詩を送られる⁵⁸⁾。節山は、江戸藩邸に招か



図5 松平定安肖像⁵²⁾

れる津山藩儒者の精溪の講釈に列座し、知遇を得ていたであろう。別離のころ、精溪はすでに60歳をこえていた。文政元（1818）年生まれの前山は40歳、下谷吟社をひらき、江戸詩壇の中心的な存在であった。節山と前山との接点は、見いだせない。定安が節山を「学友」にしたのは、年齢がちかく、節山が精溪と同様に朱子学を奉じていたからである。

定安は、国元はもとより、江戸においても、藩校教授の桃翠庵をはじめ、「儒臣」とともに經学をまなび、「自己の修養」につとめる⁵⁹⁾。定安は、13歳年上の妹尾謙三郎を「儒学御相手」として寵愛する。謙三郎は、嘉永2（1849）年、勤番を命じられ、江戸におもむくが、「儒学世話」を免じられ、「御軍用方役所」に出勤するよう命じられる。用務は「江戸近海御手当」である。謙三郎は儒者であるが、政情が緊迫しはじめると、藩主の命により周旋方として策動することになる。

謙三郎は、安政（1854～1859）はじめ、20歳になったばかりの定安から「學問の大體」について説明するよう命じられ、つぎのようにこたえる⁶⁰⁾。

學問の大體は、大學の書に相備はり、格致誠正して己を修め人を治め候は勿論の儀にて、申上候にも及ばざる事に御座候處、後世にては書物を讀み候事のみ學問と相心得、瑣細の文義字訓に心力を費し、本意を取り失ひ候儀も是ある様存じ奉り候。

書物を讀候儀は、學問の道にあらずと申候趣意には是なく、聖人も數々文を學ぶと仰せられ候こと故、讀書も大切な事には候へども、讀書にばかり流れ候ては、記誦訓詁の學と申候て、聖賢大學の道にては是なく候。

畢竟申上候通り、修己治人の道に御座候へば、時宜を考へ候て、今日の上に活用仕らざる人は、眞學問とは申し難く候。

この修己治人の道と申候は、二つにして一つにつゞまり候事にて、禪學の如きは、修己の道に似より候へども、治人の道なく、功利の學は、治人の道は得候様に相見候へども、修己の道なく<後略>

「學問」の要諦は、四書のひとつである『大学』に集約される。「學問」の核心は「修己治人」にある。漢唐の時代には、「讀書」だけが「學問」とみなされ、章句にこだわり、字句の穿鑿に専念し、「學問」の「本意」を見失っていた。「讀書」だけに没頭すれば、それは「記誦訓詁の學」にすぎない。「聖賢大學の道」とはいえない。「學問」は、「修己治人の道」を究めることであるが、現実の政情に「活用」することができなければ、「眞學問」とはいえない。「禪學」では、「修己の道」はあるが、「治人の道」はない。「功利の學」、すなわち徂徠学には「治人の道」はあるが、「修己の道」はない。謙三郎は、道德倫理を忌避する徂徠学を否定する。

謙三郎の意見は、独創的なものではない。定安も、朱子学の基本はまなんでいる。昌平黉の改革のさいにとりこまれた「正学」は、大坂で生まれた朱子学攻究グループに淵源する。

グループの中心メンバーの頼春水は、つぎのように述べる⁶¹⁾。

風－俗之漸靡薄。其可^キ歎^ス乎。風－俗之漸靡－薄。由^ニ道之不^レ明也。道之不^レ明。由^ニ學之不^レ正也。道也者何。倫理也。學也者何^ソ。明^レ之^ヲ也。倫理之外無^レ道。明^レ之^ヲ外無^レ學。奚以^ニ歟^ニ。為^ニ尚有外^レ之學^ヲ者者。正學之名。於^レ是乎立焉。夫學有^ニ正雜之名^ニ。抑末也。雖然ト。風俗之醇－醜。職此ニ之由。

「風俗」が嘆かわしいほどに靡薄になったのは、「聖人の道」があきらかではないからである。「聖人の道」があきらかではないのは、「学問」がただしくないからである。「聖人の道」は何かと問えば「倫理」である。「学問」とは何か、「聖人の道」をあきらかにすることである。「倫理」のほかに「聖人の道」はなく、「聖人の道」をあきらかにするのは「学問」のほかにはない。ところが、「聖人の道」を排除し、「学問」とするものあらわれた。そうした異説が「正学」の名称をなりたたせる。「学問」は「正」と「雑」にわけられるが、「風俗」の「醇－醜」，「風俗」が純粹か夾雜物がまじっているかは、もっぱら「学問」による。

「古人之學」は「倫理而已」であった⁶²⁾が、荻生徂徠があらわれ、「学問」から「倫理」を排除する。徂徠派が一世を風靡したのち、折衷派、考証派が台頭し、儒学を学術的な方法論の対象とみなす風潮が生まれる。折衷学は、新奇な学説が競うなかで、思想を相対化しようという流れのなかで生まれる。考証学は、清朝考証学の方法を取りいれ、「ある文献の成立、語句の意味、文字の異同等を、他の文献と比較検討し、客観的証拠によって確定する学問の方法」を確立する⁶³⁾。「異学」は、「新奇之説」をとえ、「風俗を破候類」、すなわち社会的な倫理性を蔑ろにする。「新奇之説」は、朱熹の經書解釈から逸脱した説である。その意味では、朱子学以外の学統学派は、すべて「異学」であるが、公序良俗をそこなうのは徂徠の学説のほかにない。しかし、折衷派にしても、考証派にしても、実践倫理を重視する。正学論は、徂徠の学説への批判によりなりたつ。

定安は、弘化はじめに発令された藩校改革の触れを実現するため基盤をととのえる。藩校教授は桃翠庵、妹尾謙三郎と桃節山も林家塾においてまなんだ朱子学を奉じる儒者である。定安は、藩校教授の桃翠庵の意見を徴しながら、謙三郎と節山に朱子学徒を増殖し、同時に「異学」の残滓を駆逐する役割をになわせる。定安が、安政2（1855）年に、城下で家塾をいとなむ妹尾謙三郎、園山齡の子朔助、谷敬蔵の門生を試業したのは、朱子学の浸透状況を把握するためであろう。

万延年間（1860～1861）、定安は「内規」をさだめ、藩内に触れをだす⁶⁴⁾。

學問ハ凡テ朱子ノ學派ニ取極ム先是文政八／年九月藩主某林家ヘ入學ニ付向後素讀講釋共ニ朱註ヲ通用ス可キ旨藩中ヘ達セリ

藩校だけでなく、城下の家塾や私塾においては、儒学諸流が併存していた。触れは、「朱子ノ學派」以外の学派を藩内から排斥し、「素読」、「講釈」とともに「朱註」だけに限定するよう

命じたものである。この通達において、文政期に「林家へ入學」した「藩主某」とは、9代藩主斉貴である。実名をさけたのは、もともと英邁であった斉貴が、遊興にふけり、藩財政を悪化させたとして、親戚の福井、津山、佐賀の諸侯が協議し、隠居させられたからである。しかし、大学頭の林述斎に師礼をとり、林家との関わりを深め、「昇平校」モデルを移植する契機をつくったのは斉貴である。

定安の触れは、文久2（1862）年2月には具体化され、「學科學規及諸則」が制定される。「學則表」は、「初等」から最上級の「一等」にいたる9等からなる学科課程を明示する。「入學」は創設時の經過的な課程として設けられる。「學則表」は、「學問ハ凡テ朱子ノ學派ニ取極ム」、「素讀講釋共ニ朱註ヲ通用ス可キ」という原則を反映し、いくつかの特徴をもつ。ふたつだけ指摘する。第1に、9等の各等に指定される学習テキストは「朱子ノ學派」の教説を段階的に修得できるように配置される。「初等」から「七等」までが素読課程である。「初等」では、朱熹が教説の中核に据えた四書、すなわち『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』が課書に指定される。「八等」・「七等」では、五經、すなわち『易經』、『書經』、『詩經』、『礼記』、『春秋』が課書に設定される。五經は、孔子が、既存の文献資料のなかから選択・編集したといわれる「六經」のうち、漢代に復元された5種の、儒学のもっとも基本的な經書である。

朱子学への批判から生まれた徂徠学は、その学説を会得させるために、どのような素読課程を用意したであろうか。文化2（1805）年に創設された庄内藩の致遠館は、廃藩置県まで「徂徠ノ学」にもとづく教育をおこなった藩校である。

文化13（1816）年には句読所、本舎、外舎などの校舎が増築される。句読所は、「幼年子弟」に「經書ノ句讀素讀ヲ授ク」る場である⁶⁵⁾。いわゆる素読課程の教科用書は、「一定ノ訓點」が付された「孝經論語詩經書經禮記大學中庸易」である。四書という朱子学の括りはないが、四書の『大学』、『中庸』も教科用書にふくまれる。『大学』、『中庸』は、宋代に成立した中国儒学の基本的な經書である十三經にはふくまれない、朱子学独自の儒学書である。朱子学の必読書は、徂徠学においては「聖人の道」を記した「書籍」ではなく、宋代の儒者が

表 明教館學則表 文久二（一八六二）年二月⁶⁵⁾

學則表		文久二年二月
明教館		
ノ書 諸子百家	一等	
易 春秋 禮記	二等 對讀 質問	
書經 詩經	三等 對讀 質問	
近思錄 中庸 孟子	四等 上 同	
論語 大學	五等 上 同	
小經 孝經	六等 上 同	
禮記 書經	七等 讀 素	
易 詩 春秋	八等 上 同	
孟子 論語 中庸 大學	初等 上 同	
孝經 千字文 三字經	入學 上 同	

「我意」をまじえたもの⁶⁷⁾であることを理解させるための必読書である。漢籍には「訓点」が付されるが、朱子学の新注ではなく、古注にもとづくものである。朱子学の素読用書との相違は、ひとつは五経が重視される点、もうひとつは唐漢代の古注にもとづき、訓点が付される点である。但徠は、漢文は唐音で読むべきであると主張するが、太宰春台が初学者のために付した春台点もある。

松江藩校では、素読課程から「質問・対読・会読」課程にすすむ。学習テキストは、『孝教』、『小學』、『近思録』、四書五経である。『孝教』は、封建社会における道徳を説く、儒学の入門書として普及した経書である。『小學』は、朱熹の門人劉子澄が編集した初学者用の教科書である。『近思録』は、朱熹と呂祖謙が、北宋の道学者、周濂溪、程明道、程伊川、張横渠の言説からその精粹を選び、編集したものであり、性理学の新しい思想を集大成した儒学書である。

学習用書としての四書五経は、林羅山が宋の新注、すなわち「朱註」により訓点、道春点を付したものである。昌平坂学問所はもとより、多くの藩校も素読課程をおえたものだけを受け入れる。素読課程だけでなく、「入學」のような初学者の課程が設置されるのは、入門者に基礎から朱子学の教説をまなばせるためである。さまざまな学派の儒者が藩内で個人的に句読をさずけていたことが窺い知れる。

第2に、学習段階は、通例、素読、講釈、会読と通称される3段階からなるが、「学則表」は「素読」、「質問・対読・会読」、「看読」という3段階を明記する。素読は、句読とも呼ばれ、経書の文字を声にだしてくりかえし読み、意味内容を理解することなく、全文をひたすら暗誦する段階である。四書五経の素読を終えれば、ほとんどの漢籍を自在に読みこなせるようになる。初学者は、素読をおえれば、「質問・対読・会読」の段階にうつる。初学者は、各等に割りあてられた課書を自読しながら、その内容を理解しなければならない。しかし、初学者は、訓点が付されていたとしても、経書を理解することはできない。

秦の焚書により消失した儒家古典は漢代に復元され、唐代に五経のテキストが定められる。五経の正統公認の解釈集成『五経正義』が編述され、漢以来の註釈を選択し、その註釈に解説がほどこされる。テキストが経、注釈が注、その解説が疏と呼ばれる。『五経正義』以前の注釈は古注と呼ばれる。宋代には、朱熹により四書の注釈書である「四書集注」が編述されるが、「四書集注」についても大量の疏釈書が生みだされる。

松江藩校で、講釈という伝統的な教授方法が採用されないことはない。儒者は、それぞれの経書テキストについて蓄積されている注釈、疏釈にもとづき経書テキストについて講釈する。儒生は、『大学』について講釈を聴きながら、『大学』を自読する。『大学』について疑問があれば、上級生や教授スタッフに「質問」する。「対読」は2、3名で行う小人数学習である。7、8名でおこなう集団学習は、輪読と呼ばれる。『大学』を課書とする儒生は、『大学』

を数人で「対読」する。疑問が生じれば、上級生や教授スタッフに「質問」する。「会読」は、数人から10人くらいのほぼ同程度の学力のものがグループでおこなう共同学習である。

徂徠は、「講説の諸生を害すること小小ならざる」⁶⁸⁾として講釈の10害を列挙する。護園塾や仁斎の同志会のように、専門性のたかいレベルのばあいとは異なり、素読を終えたばかりの学習者には講釈は不可欠である。松江藩校では、「会読」は「余り数多キハ好マサルコトナリ」として制限される⁶⁹⁾。それは、「会読」は「一字一句ノ文字ニ拘局シテ博ク渉ルコト能ハサルモノ」であるからである。「一字一句ノ文字」の穿鑿に終始すれば、朱子学の本質を理解することはできない。それだけではない。徂徠は、「朋友聚候て會讀くはいとくなどいたし候得ば。東を被言候て西の合點参り候事も有之候」⁷⁰⁾と述べ、的はずれであっても、仲間同士がたがいに自由な議論のなかで競いあい、切磋琢磨すれば、真理がみいだされると持論を展開する。それは、朱子学の教説とはかけはなれた「新奇ノ説」が生まれる端緒になる。松江藩校は「徳を修むる」場にほかならない。松江藩校における「会読」は学習者の創造性や自主性を尊重する学習方法ではない。「質問・対読・会読」は学習する立場から表記したものであり、実際には講釈を基盤とした学習の方法にほかならない。

「等級」は、学習者の習熟度をしめす指標である。松江城下や藩領の私塾や寺子屋などの藩校以外でまなんだものは、「試鑒」により「相應ノ等」に編入される。「試鑒」は、習熟度をはかるだけでなく、朱子学の教説をまなんでいるか否かを吟味するために実施される。同時に、藩領において、「異学」を教授するものを摘発するためのものでもある。藩校生のなかで「異端ノ道ニ馳ルモノ」は、「悔悟戒愼」しなければ、「退学」させられる。藩士だけが藩校に入ることができるが、「退学」は松江藩士の士籍を剥奪されることを意味する。

「一等」生は、「諸子百家ノ書」、すなわち周末から漢にかけて出現した墨家、法家、道家などの諸学派の人びとがのこした漢籍を独看する。代講したり、会読の会頭をつとめたりしなければならない。「一等」は「儒者」の「家業人」のレベルである。藩校儒者の再生産もおこなわれていたであろうか、すでに谷敬蔵、信太謙次郎、水田善次郎などの「家業人」の出身ではないものが、儒者として藩校で教鞭をとっていた。「一等」生は「家塾」をひらくこともできる。「三等」以上の書生は「素讀ノ師匠」になることもできる。

文久2（1862）年の「學科學規及諸則」により、松江藩内を朱子学だけに規制する装置が稼働する。それは、斉貴がきずいた松江藩と林家との紐帯の延長線のうえに定安が構築した幕府との連帯の表徴でもあった。

おわりに

寛政2（1790）年の異学の禁ののち、幕府にならい藩校を朱子学の教授・学習の場に再編する藩もあらわれる。親藩である松江藩は、異学の禁から70年あまりものちの文久2（1862）

年、10代藩主定安のもとで藩校の改革が実施され、朱子学だけを教授することになる。この改革にいたる過程をたどるばあい、定安が藩校の改革を認識するにいたる経緯について検討しなければならない。それは、定安が藩主として朱子学に依拠しなければならいと認識する過程でもある。

松江藩も、宝暦年間（1751～1764）ころから、藩士やその子弟のために教授・学習の場を設ける。江戸藩邸では荻生徂徠の門人宇佐美瀧水、国元では神田湯島の林家塾で研鑽した桃白鹿が儒学教育をゆだねられる。勤番や遊学のために江戸におもむき、瀧水のもとでまなんだ藩士が帰藩し、徂徠学が国元に根ざす。松江藩では、「老儒輩ハ皆徂徠學ヲ好ムノ風」が生まれる。「徂徠學」とは、「私的な自己解放を放恣に実現させる」側面をもつ徂徠学⁷¹⁾だけでなく、儒学を学術的な方法論の対象にする折衷学、考証学などの朱子学以外の学派もふくまれる。松江藩では、儒学は藩士の教養のレベルでとらえられ、個人的な志向にゆだねられていた。桃白鹿は、松江城下の役宅の敷地にもうけられた茅葺きの一棟を明教館と名付け、藩士子弟をうけいれる。桃家が3代にわたり教授職を世襲するが、桃家に後継者が枯渇すると、朱子学以外の学派の藩儒者が教授職をうけつぐ。桃家の門人のなかから朱子学を奉じる儒者が生まれることもなかった。禁欲的な自己抑制をもとめる朱子学が松江の土壤にあわなかったであろうか。

内憂外患の時代をむかえ、松江藩も幕藩体制の危機や社会秩序の動揺に対応するために、弛緩した士気をたかめ、尚武の気風をたてなおし、鞏固な家臣団につくりかえる必要が生じる。嘉永6（1853）年に襲封した藩主定安は、藩士ひとりひとりの規範意識を呼び覚まし、かれらの精神的な拠り所となるのは、朱子学のほかにないと確信する。津山藩主松平斉孝の4男として美作津山に生まれ、幼少期から津山に根ざした朱子学になじんでいた。定安は、藩校教授の桃翠庵、妹尾謙三郎と翠庵の嫡子節山という八代洲河岸の林家塾でまなんだ儒者とともに藩校の改革案を練り、朱子学に藩校における排他的な地位をあたえる。藩校における「学問」は、たんなる「読書」や「記誦訓詁の学」ではなく、「修己治人の道」を究めることである。朱子学では、「修身齐家治国平天下」（『大学』）という基本的な実践倫理がもとめられる。ひとりひとりが道徳的修養にとりくめば、社会秩序を維持することができる。

松江藩校では、改革案が具体化され、文久2（1862）年2月、「學科學規及諸則」が制定される。藩校からは異学が排除され、「素読」、「講釈」とともに「朱註」だけに限定される。「昌平校」モデル移植の端緒がひらかれる。桃家2代の西河は、勤番でおもむいた江戸において邂逅した異学禁令の申達の趣旨に賛同し、松江藩に「正学」を根づかせようとする。異学の禁の申達⁷²⁾により、幕府は昌平黌を直轄化し、第1に寛政正学派の「正学」を幕府の正統教学として位置づけ、幕藩体制を思想的に補強する「正学」の「講窮」機関として再編する。第2は、直轄化した昌平坂学問所を幕政の実務をになう人材の発掘・登用する教育機関に再

編する。松江藩校の改革は、「昌平校」モデルを取り入れることにより、藩校に、昌平坂学問所がはたす機能をになわせるための改革であった。

なお、専門の学者を養成し、諸藩に朱子学者を供給したのは、昌平坂学問所書生寮、八代州河岸の林家塾である。そのほかに、林家敷地内の佐藤一斎や河田迪斎の私塾、昌平坂学問所儒者の家塾からも儒者が輩出する。桃翠庵、妹尾謙三郎、桃節山も、昌平坂学問所の理念、学科課程を継承する「昌平校」モデルの移植の担い手である。

岡本徹教授のご多幸をお祈りします。

【註】

- 1) 「舊松江藩」、『日本教育史資料集』第4分冊、富山房、明治24年、258頁。
- 2) 「東都祇役要記」、佐野正己、『松江藩学芸史の研究』、明治書院、昭和56年、394頁。
- 3) 桃西河、『座臥記』、森銃三・北川博邦編、『続日本随筆大成』、吉川弘文館、昭和54年、158頁。
- 4) 「桃題蔵」、島根県立図書館郷土資料編、『松江藩列士録』第6巻、島根県立図書館刊、2006年、422頁。
- 5) 「桃黄園墓碑」、谷口廻瀾、『島根儒林傳』、飯塚書房、昭和52年覆刻（昭和15年初版）、18～19頁。
- 6) 「園山西山」、『松江藩列士録』第3巻、2006年、460～461頁。
- 7) 笠井助治、『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、昭和45年、1084頁。
- 8) 「園山西山碑」、『島根儒林傳』、21～22頁。
- 9) 「宇佐美瀧水」、原徳斎、『先哲像伝』第1集、裳華書房、明治30年、76頁。
- 10) 青柳文蔵、『続諸家人物志』中、北沢貞助、文政12（1829）年、415丁。
- 11) 『松江藩学芸史の研究』、248～252頁。
- 12) 『消暑漫筆』抄、松江市史編集委員会編、『松江市史』史料編8、近世Ⅳ、724頁。
- 13) 『松江藩学芸史の研究』、443頁。
- 14) 『座臥記』、117～118頁。
- 15) 「田村寧我碑」、『島根儒林傳』、33～34頁。
- 16) 島根県学務部島根県史編纂掛編、『島根県史』第9篇 藩政時代下、島根県、昭和5年、527～528頁。
- 17) 「原田良助」、『松江藩列士録』第1巻、2004年、314～315頁。
- 18) 「有徳院殿実紀」附録第10、経済雑誌社編刊、『国史大系』第14巻、明治36年、294頁。
- 19) 小林善八、『日本出版文化史』、日本出版文化史刊行会、昭和13年、366頁。
- 20) 「有徳院殿実紀」巻13、『国史大系』第13巻、明治37年、721頁。
- 21) 前田勉、「林家三代の学問・教育論」、『日本文化論叢』巻23、2015年3月、39頁。
- 22) 「有徳院殿実紀」附録第10、『国史大系』第14巻、295頁。
- 23) 「校刻延喜式序」、藤原時平・藤原忠平撰、松平齋恒・松平齋貴校、『延喜式』巻一、写本、島根大学図書館デジタルアーカイブ。「序」は見開き5枚である。図1は「源朝臣齊貴」と「源弘賢」が記載される部分を合成したものである。
- 24) 高橋梅園、『不昧公』、山陰新聞社、大正6年、63頁。
- 25) 「松平氏下」、桃好裕、『出雲私史』巻12、博広社出版部、明治25年、32丁。
- 26) 中山信名平四撰、『塙先生伝並檢校年譜』、経済雑誌社、明治35年、391頁。
- 27) 「塙前總檢校年譜」、『塙先生伝並檢校年譜』、経済雑誌社、明治35年、398～407頁。
- 28) 東京大学図書館には、天保7（1836）年に書写された『廣隆寺縁起』が所蔵される（東京大学 OPAC）。
- 29) 「正編解説」、松浦静山、中村彦彦・中野三敏校訂、『甲子夜話』6、平凡社、1978年、433頁。
- 30) 「校刻延喜式序」、藤原忠平他撰、源齊恒校、『延喜式』巻第1、文政11年源齊貴序、島根大学図書館デジタルアーカイブ。
- 31) 「屋代弘賢」、清宮秀堅（棠陰）、『古学小伝』巻3、玉山堂、明治19年、26～27丁。
- 32) 崇文院編、『蕉窓文章』巻一、崇文叢書第1輯巻5、崇文院、大正15年、16～17丁。国会図書館デジタル

コレクション。

- 33) 石井良助・服藤弘司編、『幕末御触書集成』巻五，岩波書店，1994年，300頁。
- 34) 「雨森精翁」，谷口廻瀾，『島根儒林傳』，飯塚書房，昭和52年覆刻（昭和15年初版），196～235頁。
- 35) 『島根儒林傳』，197頁。
- 36) 関山邦宏・高木靖文・橋本昭彦編，『「升堂記」（東京都立中央図書館河田文庫本）「登門録」翻刻ならびに索引』，1998年，55頁。
- 37) 『松江藩学芸史の研究』，308～309頁。
- 38) 「初学課業次第」，同文館編輯局編，『日本教育文庫』学校篇，同文館，明治44年，737頁。
- 39) 唐李延壽撰，『南史』80巻，毛氏汲古閣刊，崇禎13年，国会図書館デジタルコレクション。
- 40) 石川謙，『日本学校史の研究』，講談社，昭和35年，358頁。
- 41) 「桃題蔵」，『島根儒林傳』，422～424頁。
- 42) 「舊松江藩」，『日本教育史資料』第4分冊，258頁。
- 43) 『松江藩学芸史の研究』，305，355，359頁。
- 44) 「桃題蔵」，『松江藩列士録』第6巻，422～424頁。
- 45) 「松江藩学事暦」，『島根儒林傳』，7頁。
- 46) 栗原信充画，『肖像集』7，写，江戸後期，国立国会図書館デジタルコレクション。
- 47) 「近世藩校に於ける学統学派の研究」下，1120～1121頁。
- 48) 「昌谷精溪」，馬場不知也著刊，『備作人物伝』，明治34年，73頁。
- 49) 「稲垣木公」，同上書，51～53頁。
- 50) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』下，1121～1123頁。
- 51) 「慎徳院殿御實紀」巻17，嘉永6年7月3日，成島司直等編，『徳川実紀』續第3篇，経済雑誌社，明治39年，703頁。
- 52) 松平直亮著刊，『松平定安公伝』，口絵，昭和9年，6～7頁，国立国会図書館デジタルコレクション。
- 53) 同上書，6～7頁。
- 54) 「桃節山」，『島根儒林傳』，128～160頁。
- 55) 「桃文之助」『松江藩列士録』第6巻，424～426頁。
- 56) 『松平定安公伝』，6～7頁。
- 57) 「桃節山」，『島根儒林傳』，129頁。
- 58) 「桃節山」，同上書129～130頁。
- 59) 『松平定安公伝』，30頁。
- 60) 『島根儒林傳』，204～207頁。
- 61) 頼春水，『正学指掌』序，天明5年，頼維勤編，『静寄軒集』（『近世儒家文集集成』第10巻），ペリかん社，平成3年，279頁。
- 62) 古賀樸，古賀季曄校，『精里初集抄』巻3，愛月堂，文政元（1818）年。
- 63) 加地伸行他，『皆川淇園・太田錦城』，明德出版社，昭和61年，218頁。
- 64) 「學事上ノ諸制度」，「旧松江藩学校」，文部省総務局編，『日本教育史資料』第2分冊，富山房，明治23年，463頁。傍線割注。
- 65) 「教則」，「旧松江藩学校」，同上書，467頁。
- 66) 「舊庄内藩」，『日本教育史資料集』第1分冊，明治23年，826～835頁。
- 67) 「徂徠先生答問書」下，島田虔次編，『荻生徂徠全集』第1巻，すず書房，1973年，471頁。
- 68) 『訳文筌蹄』初編巻首，戸川芳郎・神田信夫編，『荻生徂徠全集』第2巻，みすず書房，1974年，552頁。
- 69) 「明教館教導条目」，松江市史編集委員会編，『松江市史』資料編8，近世Ⅳ，松江市，平成28年，750頁。
- 70) 「徂徠先生答問書」下，470頁。
- 71) 中野三敏，『十八世紀の江戸文芸』，岩波書店，2015年，49頁。
- 72) 「朱学維持ノ儀林家へ達」，菊池駿助纂修，『徳川禁令考』第14巻，司法省，明治15年，62～63丁。

Zusammenfassung

Über die Verpflanzung der orthodoxen
Lehre der Shōheikō im Matsue-Clan

Jun MORIKAWA*

Nach dem Verbot der heterodoxen konfuzianischen Lehre in der Shōheikō, der konfuzianischen Schule der Tokugawa-Regierung, nahmen die mehrere Clane die Shushigaku auf. Im Matsue-Clan bestand aber die verschiedene Schulen auseinander.

In dieser Studie möchte ich untersuchen, unter welchen Umständen die Daimyatsschule in der Burgstadt Matsue als die orthodoxe konfuzianische Schule reorganisiert wurde.

* Professor Emeritus, Hiroshima Shudo University